

(続紙 1)

京都大学	博士（情報学）	氏名	高梨 克也
論文題目	多人数インタラクションにおける参与役割と成員性に関する研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文では、人間同士のインタラクションの認識と支援を目指す情報学的アプローチである会話情報学の一環として、日常生活環境で自然に生起する多人数インタラクションに特徴的な行動や場面のモデル化を目的とし、そのための分析手法の提案と転記・ビデオデータの分析による実証を行っている。</p> <p>多人数会話を対象とする場合、複数の聞き手のうちの誰が当該発話の受け手や次話者になるかという参与役割の決定要因の解明が重要になるが、順番交替と隣接ペアという2つの主要な分析概念だけでは、「特定の参加者が特定の内容の発話を行う」ことの適切性が説明できなかった。また、多人数会話でも実際には「現在の話者の直前の話者が次の話者になりやすい」という二者間バイアスが観察されることが多く、この状態が続く限り、傍参加者はその地位にとどまらざるを得ないため、逆に、傍参加者の発言機会とその理由を説明することも課題であった。これらの課題に対して、本論文では、成員カテゴリー化装置の概念を応用したモデルを提案し、さまざまな種類の多人数会話を対象とした分析を通じて、その有効性を検証している。</p> <p>第1章では、情報学におけるインタラクション研究の流れと、その中で近年盛んになりつつある会話情報学のアプローチの特徴や狙いを概観した上で、会話情報学で重視されている情報技術による人間同士のコミュニケーションの支援という目的にとって、多人数インタラクションにおける参与役割の決定メカニズムの解明が重要な課題の一つであることを述べている。続く第2章では、多人数インタラクション分析のための主要分析概念についての理論的な再検討を通じて、上記の2つの理論的課題を明確化している。これらの課題に対して、第3章と第4章では、異なる多人数会話コーパスを対象として、成員カテゴリー化装置の概念を応用したモデル化と実証を行っている。</p> <p>まず、第3章では、参加者間の親疎関係の組み合わせ（全員友人～全員初対面）を実験的に統制して収録した三者会話コーパスを用いた分析を行っている。分析では、初めに、受け手や次話者の選択のために実際に用いられている言語表現を特定すると共に、これらの言語表現が参加者間の共有知識や会話連鎖上の位置といった文脈要因を考慮しつつ用いられていることを明らかにしている。次に、参加者間での順番移行を測定し、このコーパスにおいても二者間バイアスが実際に観察されることを確認している。さらに、「評価連鎖スキーマ」を提案し、これを参与役割と組み合わせた分析を行うことを通じて、「傍参加者からの評価発話」や「傍参加者への評価発話」という三者会話に特有の会話連鎖パターンが参加者間の親疎関係に基づいて説明できることを例証している。</p> <p>一方、人間同士のコミュニケーションの支援という目的にとっては、人々が日常的にコミュニケーションを行う自然な環境において、自発的な参加の動機を持って行われた「自然に生じた会話」を分析対象とすることが重要となる。これは近年のワークプレイス研究やこの観点からのミーティング分析の隆盛にも符牒する。そこで、第4章では、約半年間継続的に開催された展示制作のための多職種ミーティングを対象とした分析を行っている。初めに、ミーティングの定期的な出席者の間での発言量の偏りの全般的傾向を明らかにするとともに、各回のミーティングを談話区間に区切り、各参加者の発言率の区間間での変動を調べることによって、会話における局所的な参与構造を推定する手法を提案している。次に、多職種グループにとっての問題の</p>			

発見と解決に資する懸念導入表現「気になる／するのは／のが」を見出し、この表現によってあるメンバーが懸念を表明すると、他のメンバーがその解消に貢献する応答を行うという観察に基づき、これを懸念表明－解消連鎖として定式化している。最後に、この連鎖の最中に傍参加者が積極的に発言していることと、こうした発言の生起を当該参加者の職能などの成員性とこれに基づくカテゴリー付随活動の観点から適切に説明できることを実証している。

しかし、懸念導入表現によって表明された懸念事項のすべてが当該のミーティングの最中に解決できるわけではない。そこで、第5章では、懸念導入表現を契機とした問題提起が多職種メンバーの協働によって問題解決に至る過程をエスノグラフィの手法で分析している。一般に問題解決の過程では、メンバーはさまざまな方法を用いて、発見された問題を徐々に明確なものへと定式化していくことによって解決策を見出していく。この点について、事例分析を通じて、問題の定式化と解決のために、模型やジェスチャーといった環境内のさまざまな物質的対象が、当該の問題を表現するための「表象」として相互行為の場に順次創発的に導入され、効率的な共同問題解決が可能になっていることを明らかにしている。

第6章では、二者間バイアスと傍参加者の発言に関する分析枠組みを、近年社会的に重要になりつつあるサイエンスカフェの分析に応用している。サイエンスカフェでは、科学者と一般参加者という成員カテゴリーの異なる参加者の間に知識量などの非対称性が存在するため、科学者と一般参加者の間で「一対多」や「一対一」という授業形態での参与枠組みが固定化されやすく、複数の一般参加者の積極的な参加を妨げる要因となるという問題が認識されていた。そこで、実世界で行われたサイエンスカフェを対象として、授業形式での会話状態の契機となる会話行動や、逆に、参加者間でのコミュニケーションの双方向性が高まる契機となる会話行動を特定し、その相違を科学者がカフェの場の「ホスト」のような「科学者」以外の成員カテゴリーを柔軟に用いているという、成員カテゴリーの多重性の観点から説明できることを明らかにしている。

最後に、第7章では、以上で論じた問題と得られた知見を要約している。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、多人数の会話やミーティングなどのデータを対象に、会話情報学及びワークプレイス研究の観点から分析・モデル化を行った研究をまとめたものである。特に、多人数会話における参与役割と成員性に着目し、次話者の特定を説明する新たなモデルを提示している。具体的に得られた主な成果は次の通りである。

1. 親疎関係を統制して収録した会話データを分析し、共有知識に基づいて参与役割が規定されることを見出した上で、自由会話において典型的に見られる会話連鎖をモデル化した「評価連鎖スキーマ」を提案した。これにより、従来のモデルでは説明できない傍参与者を含む話者交替の事象を説明できることを示した。
2. 様々な関係者によるプロジェクトミーティングの会話を収録し、ワークプレイス研究の視点から分析を行った。このようなミーティングにおいて、各会話参加者の職能や所属組織の役割に基づいて成員カテゴリーが規定されることに着目し、問題提起・解決を行う談話を導入する「懸念導入表現」を見出した。その上で、傍参与者への話者交替が頻繁かつ自然に行われることが成員カテゴリーによって説明できることを示した。
3. 科学者が一般市民と行うサイエンスカフェにおける会話を収録し、分析を行った。科学者は市民の質問に答える専門家という成員性だけでなく、カフェのホストのような役割を持つという複数の成員性を想定することにより、参加者全員の関与を妨げたり、逆に高めるような会話行動のパターンを見出すことができた。

以上のように本論文は、会話分析に関して新たな枠組みを提案するとともに、統制された条件だけでなく、実世界で行われ、かつ分析が必要とされている多人数会話を対象として興味深い知見を提示するもので、学術上・実用上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（情報学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年 2月19日に論文とそれに関連した内容に関する口頭試問を行った結果、合格と認めた。

注) 論文審査の結果の要旨の結句には、学位論文の審査についての認定を明記すること。
更に、試問の結果の要旨（例えば「平成 年 月 日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。」）を付け加えること。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公開可能とする日付を記入すること。
要旨公開可能日： 年 月 日以降